

Wed. Aug 31, 2022

第6会場

Theme Symposium | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

From the current situation and issues of the collaborative system -The role played by "supporting sports"-

Chair: Mitsumasa Goto (Meiji University)

2:00 PM - 3:50 PM 第6会場 (2号館1階11教室)

[生涯スポーツ-SA-1] Sport Volunteering in Japan

*Shibuya Shigeki¹ (1. Sasakawa Sports Foundation)

[生涯スポーツ-SA-2] Roles and Future Issues of Sports

Volunteers through Special Olympics Sports Volunteering

*Tabiki Toshikazu¹ (1. Hokuriku Gakuin University)

[生涯スポーツ-SA-3] Cohesive Society and Sport Volunteer

*Ninomiya Masaya¹ (1. Bunkyo University)

第8会場

Theme Symposium | 健康福祉研究部会 | 【課題A】 健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

Promotion of Health and Physical Fitness According to Different Lifestyles: Lived Experiences of Women, Health and Sport

Chair: Masayuki Takao (Tokai University) Designated Debater: Rieko Yamaguchi (Josai University)

2:00 PM - 3:50 PM 第8会場 (2号館2階21教室)

[健康福祉-SA-1] The Need for Gender-specific Conditioning

*Sunaga Mikako¹ (1. Nippon Sport Science University)

[健康福祉-SA-2] Gender Differences in Children's Physical Activity and Secular Trends in Physical Fitness

*Nakano Takahiro¹ (1. Chukyo University)

[健康福祉-SA-3] The Curriculum Guidelines and Women's Sports

*Takahashi Shuichi¹ (1. Japan Women's College of Physical Education)

第1会場

Theme Symposium | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養

成をいかに効果的に行うか

The Significance and Challenge in University as a Base for Top Athlete Development II -Articulation of top Athletes from Universities to the Professional Sports Teams or Non-Professional Teams Sponsored by Corporations-

Chair: Hironori Tanigama (Toyo University), Yosuke Tahara (Aoyama Gakuin University)

2:00 PM - 3:50 PM 第1会場 (3号館3階301教室)

[競技スポーツ-SA-1] Para- athletes perspective

*Mizuno Yoko¹ (1. Nippon Sport Science University)

[競技スポーツ-SA-2] Perspective from Women's Basketball

*Ikeda Eiji¹ (1. University of Tsukuba)

[競技スポーツ-SA-3] Perspective from Men's Soccer

*Susa Tetsutaro¹ (1. Hannan University)

第2会場

Theme Symposium | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

International Development through Sport and Sustainability

Chair: Masahiro Kawanishi (Doshisha University), Masayuki Enomoto (Shiga University)

2:00 PM - 3:50 PM 第2会場 (3号館4階401教室)

[スポーツ文化-SA-1] Position and Possibility of

International Development and Peace through Sport Studies

*Yamaguchi Taku¹ (1. University of Tsukuba)

[スポーツ文化-SA-2] A Japanese Perspective on

Developing Countries Promoting Sports Development

*Sagawa Tetsuya¹ (1. Kanazawa University)

[スポーツ文化-SA-3] Possibilities of Lesson Study

Approach in International Cooperation in “ Sport and Development”

*Saito Kazuhiko¹ (1. Hiroshima University)

第3会場

Theme Symposium | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか

The possibility of university physical education

classes for creating symbiotic society: From the
perspective of understanding diversity

Chair: Hiroshi Imashuku (Sakushin Gakuin University), Taro
Obayashi (University of Tsukuba)

2:00 PM - 3:50 PM 第3会場 (3号館4階402教室)

[学校保健体育-SA-1] Physical education class for Hearing
and Visually Impaired Students

*Kogo Yuka¹, *Kazuhiko Amano¹ (1.
Tsukuba University of Technology)

[学校保健体育-SA-2] Possibility for university physical
education classes by including
gender and sexuality perspective

*Noguchi Aya¹ (1. Juntendo University
Faculty of Health and Sports Science)

[学校保健体育-SA-3] Possibility of university physical
education classes utilizing tangible
and intangible cultural properties that
lead to multicultural understanding

*Hosotani Yoko¹ (1. Toyo University)

Theme Symposium | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

From the current situation and issues of the collaborative system -The role played by "supporting sports"-

Chair: Mitsumasa Goto (Meiji University)

Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第6会場 (2号館1階11教室)

本テーマ研究部会では、昨年度のテーマ別シンポジウムから、共生社会と生涯スポーツが共存するためにはスポーツのパラダイムチェンジが必要であることが共有された。このパラダイムチェンジにはスポーツの見方を変える、広げる必要があり、「する」だけでなく「みる」、「支える」という視点からも共生社会と協働システムを考えることが重要である。そこで今回は、「スポーツボランティア」という存在に着目する。スポーツボランティアは、「支えるスポーツ」の象徴的な存在であり、共生社会において生涯スポーツがどのように位置づけるのかという文脈において、スポーツボランティアが果たす機能は、共同システムの中核を担うと考えている。そこでスポーツボランティアの役割や現状、課題について協議することとした。

このような趣旨を踏まえ、「スポーツボランティアの現場について」笹川スポーツ財団の澁谷茂樹氏からお話をいただく。次に、北陸学院大学の田引俊和氏から「スペシャルオリンピックのスポーツボランティアを通して考えるその役割と今後の課題」についてお話をいただく。最後に、文教大学の二宮雅也氏から、「共生社会とスポーツボランティア」と題しお話をいただく。

発表を踏まえ、共生社会実現に向けた、協働システム構築に、スポーツボランティアを例とした「支えるスポーツ」がどのような役割を果たす、または担うべきであるのかについて意見交換し、今後の政策や法律上、具体的にどのような課題があるのかについて討議を深めてゆく。

[生涯スポーツ-SA-1] Sport Volunteering in Japan

*Shibuya Shigeki¹ (1. Sasakawa Sports Foundation)

[生涯スポーツ-SA-2] Roles and Future Issues of Sports Volunteers through Special Olympics Sports Volunteering

*Tabiki Toshikazu¹ (1. Hokuriku Gakuin University)

[生涯スポーツ-SA-3] Cohesive Society and Sport Volunteer

*Ninomiya Masaya¹ (1. Bunkyo University)

(Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第6会場)

[生涯スポーツ-SA-1] Sport Volunteering in Japan

*Shibuya Shigeki¹ (1. Sasakawa Sports Foundation)

<演者略歴>

笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 シニア政策ディレクター

日本スポーツボランティアネットワーク 事務局長

スポーツを「する」「みる」活動を成立させる上で不可欠なスポーツボランティアは、地域におけるスポーツの指導や大小さまざまな規模の大会運営、スポーツ活動の基盤となる競技団体、地域のクラブ・チームの運営など、その活動内容は多岐にわたる。しかしながら、「スポーツボランティア」という言葉に多くの人々がもつイメージは、国際的・全国的スポーツイベントやプロスポーツ興行で一般公募されるイベントボランティアに限定されている。近年、ある程度の規模のスポーツイベントでは、一般公募によるボランティアが大会の運営に重要な役割を果たすようになってきた。また、そこで活動するボランティアの多くが、活動そのものや活動を通じて得られる人とのつながりに強いモチベーションを抱き、多くのイベントに積極的に参加し、活動の質を高める好循環を生み出している。本発表では、わが国のスポーツボランティアを概観するとともに、イベントボランティアの好事例の紹介・分析を通じて、広くスポーツをささえる現場が抱える課題解決に向けた議論を喚起したい。

(Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第6会場)

[生涯スポーツ-SA-2] Roles and Future Issues of Sports Volunteers through Special Olympics Sports Volunteering

*Tabiki Toshikazu¹ (1. Hokuriku Gakuin University)

<演者略歴>

知的障害者スポーツ組織「スペシャルオリンピックス」を中心に、長年、スポーツボランティアとして障害のある人たちのスポーツに携わる。立命館大学大学院社会学研究科修了（社会学博士）、社会福祉士、日本パラスポーツ協会(JPSA)上級障がい者スポーツ指導員。

「スペシャルオリンピックス」は、47都道府県に活動拠点を設け、全国で8千人（2019年末時点）を超える知的障害のある会員の日常的、継続的なスポーツを支援している。多くの部分を、理念を共有する企業・団体等の協賛、および全国の約1万人（同時点）のスポーツボランティアが支え、日々のスポーツの協働や生涯スポーツイベントの開催、ボランティア研修などを行いながら知的障害者スポーツの裾野を広げることを目指してきた。

活動を始めて25年が経ったいま、活動範囲や知的障害のある会員が拡大し、求められる内容も多様化している。新たな発見もあり、従来からのボランティア募集や養成だけでは対応できなくなっている部分もみられるようになってきた。今後、木を繁らせ、山を高める（日本パラスポーツ協会）といったことも含め、活動を持続可能なものにしていくためにはその役割、位置付けを明確にしていく必要がある。スポーツボランティアは何を支えるのか、また支えようとしている生涯スポーツとはどのようなもので、どう捉えればいいのか、一つの障害者スポーツ組織の動向、課題とともに、あらためて考える。

(Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第6会場)

[生涯スポーツ-SA-3] Cohesive Society and Sport Volunteer

*Ninomiya Masaya¹ (1. Bunkyo University)

<演者略歴>

文教大学人間科学部教授

日本財団ボランティアセンター理事

日本スポーツボランティアネットワーク理事

数多くのスポーツボランティアの募集が行われている今日であるが、そこにはボランティア参加を困難にしている障壁が存在していることがある。発表者は、識者として東京2020大会のボランティア運営サポート、並びに大会ボランティアとして実際の活動に携わったが、実際に大会組織委員会や自治体のボランティアサポートは十分だったとは言えない。それは、スポーツボランティアというキーワードがイメージさせる参加者像が固定化されていることに起因する問題であり、また、ボランティアという活動のイメージにも連動するものである。つまり、スポーツボランティアにおける「general」に関する課題であると捉えている。本発表では、スポーツボランティア活動の事例報告を通じてその問題にアプローチしたい。尚、この発表テーマにおける共生社会（Cohesive Society）とは、「必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった方が自分の意思で参加できる社会」を意味するが、逆説的には「参加しないことも選択できる状況」として捉えている。Volunteerの本質的な意味である「自由意志」を尊重しながら、スポーツボランティアの現場から広がる共生社会の可能性についてディスカッションを深めたい。

Theme Symposium | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

Promotion of Health and Physical Fitness According to Different Lifestyles: Lived Experiences of Women, Health and Sport

Chair: Masayuki Takao (Tokai University) Designated Debater: Rieko Yamaguchi (Josai University)

Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第8会場 (2号館2階21教室)

これまで健康や体力を語る際の中心であった「青年・壮年期の健常男性」に対し、多様なライフスタイルやライフコースを念頭において、これからの健康増進や体力向上のあり方を考えることが狙いである。本課題では“「女」を生きることと健康・スポーツ”というサブタイトルのもと、ジェンダー／セックスとしての女性のスポーツ経験や健康増進のあり方に焦点をあてる。この点について、本年度は特に学校教育や部活動の現状とその課題を明確化することに照準する。シンポジストには保健体育科教育、発育発達、運動生理学の専門家をお招きし、それぞれの視点から本課題への考察を示していただく。また、ジェンダー研究に精通している専門家を指定討論者としてお招きし、女性をめぐる体育・スポーツ・健康科学による複数的な知のあり方をどのように考え、社会に向けて提示していくべきなのかについて領域横断的に議論を展開していく。学問的高度化は、ともすればそれぞれの学問領域の内閉化を推し進めてしまうが、それを避けるためにも「女」として生きる経験に寄り添いながら、健康増進や体力向上のこれからのあり方について考察を深めていきたい。

[健康福祉-SA-1] The Need for Gender-specific Conditioning

*Sunaga Mikako¹ (1. Nippon Sport Science University)

[健康福祉-SA-2] Gender Differences in Children's Physical Activity and Secular Trends in Physical Fitness

*Nakano Takahiro¹ (1. Chukyo University)

[健康福祉-SA-3] The Curriculum Guidelines and Women's Sports

*Takahashi Shuichi¹ (1. Japan Women's College of Physical Education)

(Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第8会場)

[健康福祉-SA-1] The Need for Gender-specific Conditioning

*Sunaga Mikako¹ (1. Nippon Sport Science University)

<演者略歴>

博士（医学）。日本オリンピック委員会強化スタッフ（医・科学スタッフ）、日本陸上競技連盟科学委員、日本体力医学会理事、日本トレーニング科学会会長。運動時生理反応の男女差や月経周期の影響を考慮し、女性のための効率的なコンディショニング法やトレーニングプログラムの開発を目指し研究に取り組む。

成人女性の生物学的特徴として、月経周期を有することが挙げられる。月経周期とは、月経開始から次の月経の前日までの期間と定義され、約一ヶ月の周期で性ホルモン濃度が大きく変化する。このような性ホルモンの変動は、コンディション（こころやからだの調子）に影響を与えることが知られている。さらに、女性は妊娠・出産や閉経などライフステージによっても性ホルモン濃度は大きく変化し、心身の健康状態に影響を及ぼす。したがって、女性の場合には、生涯を通じて性ホルモンの影響を考慮した体調管理が必要となる。しかしながら、それにかかわる情報は十分に普及していないというのが現状である。また、健康の維持増進のためには子どもの時期からの継続的なスポーツ活動が有効であるが、月経随伴症状を理由にスポーツ参加に消極的になってしまうケースもある。今後は、学校教育や部活動を通して、女性のヘルスリテラシーを高める機会を作ることが必要であると考えられる。本セッションでは、主に月経周期に伴うコンディションの変化に着目し、健康問題やスポーツ活動への影響について検討したい。

(Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第8会場)

[健康福祉-SA-2] Gender Differences in Children's Physical Activity and Secular Trends in Physical Fitness

Focusing on the Characteristics of Girls in These Factors

*Nakano Takahiro¹ (1. Chukyo University)

<演者略歴>

筑波大学体育科学研究科修了。博士（体育科学）。名古屋学院大学教授を経て2021年4月より中京大学スポーツ科学部教授。2010~11:Indiana University 在外研究員。現在は、スポーツ庁の体力、運動能力、運動習慣等調査有識者委員会委員長などを務め、子どもの運動促進や体力向上、運動の社会、教育的効果などについて研究。

子ども期は、その後の運動への嗜好性を決定づける可能性のある重要な時期である。特に、女兒では小学校中高学年頃から、運動の好き・嫌いや得意・苦手の意識が男児以上に明確化し、嫌いあるいは、苦手と回答する児童が増加する傾向にある。そのため、この時期の運動実施については多くの配慮が必要であると考えられる。また、近年では体力低下の傾向やそれに強く関連するスクリーンタイムの増加傾向なども男女差が見られることが我々の研究データからわかってきている。さらに、女兒の保護者においては、男児の保護者に比べて、運動やスポーツに期待する度合いが低下することも、我々の調査からわかっている。本発表では、運動の嗜好性に関する性差、体力変化の性差、運動に対する期待の違いなど、ここで記した事項を中心に、実際の研究データを用いて紹介する。さらに、小学校における運動部活動参加の実態や、その関連要因に関しても部活動改革に関する調査データから検討を加える。以上を通して、子ども期の運動実施に関して、性別で配慮すべき事柄を発育発達の観点も交えながら議論したいと思う。

(Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第8会場)

[健康福祉-SA-3] The Curriculum Guidelines and Women's Sports

*Takahashi Shuichi¹ (1. Japan Women's College of Physical Education)

<演者略歴>

1988年4月から2008年3月まで山形県公立高等学校教諭、2008年4月から2014年3月まで山形県教育委員会指導主事、2014年4月から2019年3月まで文部科学省国立教育政策研究所教育課程調査官兼スポーツ庁政策課教科調査官、2019年4月から日本女子体育大学体育学部教授。2017・2018年改訂学習指導要領の編集を務める。

2017・2018年改訂の学習指導要領の体育科・保健体育科の目標には「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現（継続）する」旨の記載がある。また、同解説では、「豊かなスポーツライフを継続していくためには、運動の技能を高めていくことのみならず、体力や技能の程度、性別や障害の有無、目的等の違いを越えて、運動やスポーツの多様な楽しみ方を社会で実践することが求められる。そのため、新たに共生の視点を踏まえて指導内容を示すこととした」と示されている。他方、体育の授業を除く1週間の総運動時間が0分の児童生徒の割合が、小学校男子4.0%、小学校女子5.0%、中学校男子5.6%、中学校女子11.5%、高等学校男子14.9%、高等学校女子32.9%という調査結果もある。

本発表では、学習指導要領の趣旨や内容及び歴史的な経緯等について説明するとともに、学校における体育授業の現状等について紹介し、女性の運動やスポーツについて考えてみたい。

Theme Symposium | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

The Significance and Challenge in University as a Base for Top Athlete Development II -Articulation of top Athletes from Universities to the Professional Sports Teams or Non-Professional Teams Sponsored by Corporations-

Chair: Hironori Tanigama (Toyo University), Yosuke Tahara (Aoyama Gakuin University)

Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第1会場 (3号館3階301教室)

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点を取り上げる。2年目となる今回は、トップアスリートが大学での競技生活を経て、さらにプロ・実業団の世界へ進んで飛躍を遂げていく際の一つの課題として、両者の「接続」の側面に着目することとした。①パラアスリート、②女子バスケットボール、③男子サッカーという視点を設定し、各々の指導現場を熟知する3名のシンポジストが登壇する。卒業後も高いレベルで競技を継続するアスリートにとって、「大学」と「プロ・実業団」は、それぞれ個別に完結し得るものではなく、両者の「接続」は大きな意味を持つ。また、競技によっては、大学在学中から「プロ・実業団」の世界にチャレンジするケースも少なくない。トップアスリートが大学からプロ・実業団へとスムーズに移行するためには、大学ではどのような点を考慮した指導が必要なのか、大学生としてのアスリートはどのような意識を持てばよいのか、アスリートが所属する大学にはどのような環境整備が求められているのか、等々、競技や専門領域の枠組みを超えた積極的な議論から、課題解決の糸口を見出したい。

[競技スポーツ-SA-1] Para- athletes perspective

*Mizuno Yoko¹ (1. Nippon Sport Science University)

[競技スポーツ-SA-2] Perspective from Women's Basketball

*Ikeda Eiji¹ (1. University of Tsukuba)

[競技スポーツ-SA-3] Perspective from Men's Soccer

*Susa Tetsutaro¹ (1. Hannan University)

(Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第1会場)

[競技スポーツ-SA-1] Para- athletes perspective

*Mizuno Yoko¹ (1. Nippon Sport Science University)

<演者略歴>

2020年同学教育学研究科実践教科教育学専攻博士後期課程満期退学。2015年日体大陸上競技部パラアスリートブロック監督に就任。陸上競技部で指導したパラアスリートが、2016年リオデジャネイロパラリンピックで1名3位入賞、東京パラリンピックで2名入賞。現在も陸上パラアスリートの育成・強化の第一線で活躍している。

現在日体大では、2017年にアスレチックデパートメント（以下AD）が創設され、強化、キャリア、人事育成、マーケティングの4つに同時に取り組むことで「好循環を創出し、継続的な強化を図り、トップアスリートを輩出し続ける」ことを目的として様々な取り組みが行われている。しかし、トップアスリートの競技継続としたキャリア支援の取り組みについてはほとんど行われていない。日体大の場合は、ADだけではなく学生支援センターの学修・キャリア支援部門の事業も行われているが、一般の学生向けになり、競技を継続したいトップアスリートは個人的に「アスナビ」などで就職先をさがすか、部活動単位で就職先を探すのが現状である。

2015年に陸上部パラアスリートブロックが発足し、2016年に日本財団からパラアスリートに向けた奨学金が設置され、スポーツを行う障がい者学生が急増した。そして4年後の2020年には、その第1期生が卒業を迎えた。その時からの実状について発表し、今後デュアルキャリア支援にどのように取り組んでいくか、学生であるアスリートはどのような意識を持つべきか、就職先となる企業等との連携をどう構築するかについて、皆さんと問題を共有したい。

(Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第1会場)

[競技スポーツ-SA-2] Perspective from Women's Basketball

*Ikeda Eiji¹ (1. University of Tsukuba)

<演者略歴>

筑波大学体育系助教（女子バスケットボール部コーチ）。

山形大学地域教育文化学部准教授（女子バスケットボール部監督）を経て、2021年より現職。

わが国の女子バスケットボールにおいて、大学生トップアスリートが卒業後に目指す「プロ・実業団」の世界には、トップリーグである「WJBL」、あるいは、日本社会人バスケットボール連盟の主催する「地域リーグ」、が挙げられる。前者は、長らく「高卒」選手の割合が大きいことが特徴的であったものの、近年では、「大卒」選手の割合が徐々に大きくなっている傾向にある。一方で、後者は、従前より「大卒」選手の割合が高いことが特徴的である。このように、WJBLの第1回大会が開催された約20年前と比べ、全体として、大学を経て高いレベルで競技を継続するというキャリア形成を行う選手が増えてきていることは、「大学からプロ・実業団」という「接続」が、女子バスケットボール選手のキャリア形成に幾ばくかの好ましい役割を果たしていることの証左だと思われる。本シンポジウムでは、私自身が指導した学生の中で「プロ・実業団」の世界に身を投じた選手を事例として取り上げ、当該の「接続」において留意すべき事項を紹介（提案）するとともに、皆さまとの議論をとおして、解決すべき問題点・課題について考察したい。

(Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第1会場)

[競技スポーツ-SA-3] Perspective from Men's Soccer

*Susa Tetsutaro¹ (1. Hannan University)

<演者略歴>

1986年筑波大学大学院体育科学研究科満期退学

1987年阪南大学商学部助教授、現流通学部教授、阪南大学サッカー部監督(2021年まで)、

1990年代関西学生サッカー連盟理事長・技術委員長、1991年全日本サッカー連盟理事、現技術委員

20年以上長期低迷していた日本サッカーは、競技人口の拡大をベースとした地盤形成を背景に93年Jリーグ発足を実現させた。02W杯誘致と結びついてJFAは強化諸策に着手。しかし皮肉にも日本サッカーの強化の連環から大学サッカーが外れることに。

その隘路の克服に、99年度全日本大学サッカー連盟は5ヵ年計画を策定。JFAとの連携強化(特別強化指定選手制度・トレーニング費用の制度化等)、各地域リーグ戦の通年制化と試合数の増加、全国大会の改革によるレベルアップと地域リーグの活性化の企図、二軍選手へのIリーグの創設、ユニバーシアードを基軸とした大学選抜の強化等に着手、悉く実現。結果、Jリーグの新加入選手のほぼ過半数を大卒選手が占め、即戦力率・フル代表選出数の増加に結実。

問題点として、トレーニング環境・試合環境の整備、生活基盤の確立、教育体制づくり、一般学生との結びつき強化が挙げられる。入場料収入や放映権料に期待できない現状で、自立した資金調達が鍵ではないか。FIFAのトレーニング補償金・連帯貢献金にほど遠いJリーグのトレーニング費用の大幅増額の問題。同時に大学と地域との連携強化に根差した大学スポーツ事業の自立化にあると考える。

Theme Symposium | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

International Development through Sport and Sustainability

Chair: Masahiro Kawanishi (Doshisha University), Masayuki Enomoto (Shiga University)

Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第2会場 (3号館4階401教室)

スポーツと「開発」の関係性は非常に多様であり、スポーツの開発（スポーツ振興、スポーツに関わる諸課題の解決）、スポーツと開発（スポーツが個人や集団、社会に与える影響の検証）等、様々な視点で論じられている。グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるかという点に関して、本シンポジウムでは「スポーツを通じた開発」について議論を展開していく。「スポーツを通じた開発」とは、国際規模の社会課題の解決にスポーツの力を活用するものであり、ここでの社会課題とは特に開発途上国において深刻な貧困や紛争、教育、ジェンダー、感染症等の課題を指すものである。現在、国際連合やJICA、NGOや企業等、様々な組織によってスポーツを通じた開発支援が行われているが、支援の現場ではどのような課題が生じているのだろうか。

以上の問題関心のもと、本シンポジウムではスポーツを通じた開発支援の動向を概説した上で、支援先において体育・スポーツがどのように享受されているのか、それにとまなう身体文化の変容過程、体育科教育に関わる具体的な支援事例を報告し、持続可能な開発支援のあり方ならびに、そこでの体育やスポーツの意義について議論を深めていく。

[スポーツ文化-SA-1] Position and Possibility of International Development and Peace through Sport Studies

*Yamaguchi Taku¹ (1. University of Tsukuba)

[スポーツ文化-SA-2] A Japanese Perspective on Developing Countries Promoting Sports Development

*Sagawa Tetsuya¹ (1. Kanazawa University)

[スポーツ文化-SA-3] Possibilities of Lesson Study Approach in International Cooperation in “Sport and Development”

*Saito Kazuhiko¹ (1. Hiroshima University)

(Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第2会場)

[スポーツ文化-SA-1] Position and Possibility of International Development and Peace through Sport Studies

*Yamaguchi Taku¹ (1. University of Tsukuba)

＜演者略歴＞

筑波大学体育系助教。UNESCO IPL専門家。NGO理事・事務所長、JICAプロジェクトマネージャーなどを歴任しながらスポーツ国際開発の実践者として在外で15年以上勤務して現職。2016年にロイヤル・モニサラポン勲章大十字章を受勲。現在の主な研究テーマは「過去・現在・未来のスポーツが各開発課題に果たす役割」。

現今の社会では、世界で猛威を振るう COVID-19、無秩序な社会を象徴する終わりなき紛争、歯止めの利かない地球温暖化や自然災害の頻発など、社会的弱者はおろか一般市民の安全保障でさえも難しい状況に陥っている。そんな状況下において、個人の能力を高め、社会に潤いを与える等、時代に応じて重要な役割を担ってきたスポーツのソフトパワーは、さらなる進化を遂げ、「スポーツを通じた開発（IDS）」或いは「平和と開発のためのスポーツ（SDP）」等と呼称されるまでに至り、平和や開発などの領域で活用される中で成長の一途を辿っている。

しかし、実活動を軸に世界へ広まったこの現象は、活動内容が多様で汎用性が高く、各地の文脈に合わせた処方箋が講じられることから、研究対象になり辛く、学術分野から敬遠されていたように感じられる。しかし、そもそも総合科学領域にある開発学やスポーツ科学は、応用科学との親和性も高いことから、個別の状況に合わせた研究に向いており、多様な研究の可能性が秘められている。

今回の発表では、こうしたスポーツと開発をめぐる背景を解き明かしながら、参加者の皆さんの興味を高めつつ、後の議論の足掛かりとなる情報を提供したい。

(Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第2会場)

[スポーツ文化-SA-2] A Japanese Perspective on Developing Countries Promoting Sports Development

A Case Study of Thailand's Rapid Economic Development in the 1990s

*Sagawa Tetsuya¹ (1. Kanazawa University)

＜演者略歴＞

金沢大学人間社会研究域人間科学系教授。大妻女子大学人間生活科学研究所助手、金沢大学教育学部助教授を経て現職。筑波大学大学院体育科学研究科単位取得満期退学、教育学修士。専門はスポーツ社会学、スポーツ人類学。1986年からタイ、ミャンマー、ネパールなどにおいて子ども調査に従事。

私が初めて東北タイ調査に参加した1986年頃のタイ国は発展の途上にあり、前近代と近代が入り交じり、首都バンコクと地方には明瞭な都鄙差が認められた。東北タイの純農村、地方都市、バンコク都、そして日本という近代化・都市化水準の異なる地域勾配を研究枠組みとして、子どもの発育、生活、遊び・スポーツの研究を開始した。

伝統的生活様式の残る純農村においてさえ新校舎に建て替えられ、教室にテレビやPCが導入された。学校対抗のスポーツ競技会が盛んに開催され、教育省体育局がスポーツスクールを設置し、タイ国におけるスポーツの地位が上昇した。途上国の中でいち早く経済発展を進めたタイでは、スポーツの普及と発展を急いでいるように見受けられた。その結果として、伝統菓子よりもスナック菓子を選ぶが如く、子どもたちは伝統遊びよりもスポーツを好むようになり、世代を越えて連綿と続いてきた伝統遊びを静かに消失させることになった。こうした国々に寄り添ってスポーツ開発を語るとき、「容易く伝統文化を消失させてよいのか」「世界共通となったスポーツだけに力を注ぐことでよいのか」と発信することが使命だと感じるようになっていた。

(Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第2会場)

[スポーツ文化-SA-3] Possibilities of Lesson Study Approach in International Cooperation in “Sport and Development”

From the view of the “Physical Education Teacher Capacity Development Support in Peru” project

*Saito Kazuhiko¹ (1. Hiroshima University)

<演者略歴>

広島大学大学院人間社会科学研究科教授。青年海外協力隊（シリア）、JICA客員研究員、日本学術振興会特別研究員、徳山工業高等専門学校准教授、金沢大学准教授などを経て現職。広島大学大学院国際協力研究科修了、博士（教育学）。専門はスポーツ教育学、スポーツ国際開発学。

東京五輪開催を契機に、体育・スポーツ分野の国際貢献事業「スポーツ・フォー・トゥモロー（SFT）」が開始された。本事業は2014年に始まり、2021年度末まで行われ、100ヵ国以上を対象、1,000万人以上の裨益者を創出することを目標とし、2019年にその数値目標は達成された。

発表者は、本事業の一つであった「ペルーに対する体育教師の能力開発支援」のプロジェクトリーダーを務めた。ペルーでは2017年施行新カリキュラムにて小学校体育授業時間数が週2コマから3コマに増加し、適切な体育授業が展開できる体育教師の育成が急務となり、日本の知見の共有が求められることとなった。そこで、発表者らは、日本・ペルー両国での体育科教育専門家チームを作り、「体育授業研究」を紹介・導入する活動を実施した。

本プロジェクトでは、ペルーの文脈や、関係者の関心に応じた授業研究の展開を行い、現地専門家の主体性を尊重しながら、持続的発展を追及することを重視した。SFTプロジェクト終了後も、授業研究の展開を軸に、両国での交流が続いている。

本発表では、本プロジェクトでの具体的な活動内容やその成果について、関係者へのインタビューの結果なども踏まえつつ、報告したい。

Theme Symposium | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか

The possibility of university physical education classes for creating symbiotic society: From the perspective of understanding diversity

Chair: Hiroshi Imashuku (Sakushin Gakuin University), Taro Obayashi (University of Tsukuba)

Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第3会場 (3号館4階402教室)

本シンポジウムでは、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という課題を達成するために、3年間のテーマ「大学体育から提案する質の高い学校保健体育の提供、実現」を設定した。2年目のテーマは「共生社会の創造に向けた大学体育授業の可能性ー多様性理解の観点からー」である。

現代社会における課題の1つとして共生社会の創造を挙げることができるが、多様な人間の有り様を互いに尊重し他者と協働することができる人間を育成することが教育には求められる。それでは、身体や身体運動文化を基とする大学体育授業は如何なる貢献ができるのであろうか。本シンポジウムでは、多様性理解という観点から共生社会づくりに対する大学体育授業の可能性を検討するため、3つの立場からシンポジストにご発表いただく。その3つの立場とは、「障害学生支援」（向後氏・天野氏）、「ジェンダー・セクシュアリティ」（野口氏）、「多文化（異文化）」（細谷氏）である。各シンポジストの教育実践や経験を基に、共生社会の創造に必要な人材を育成するための大学体育授業の可能性をご提案いただき、これからの授業のあり方を検討する。

[学校保健体育-SA-1] Physical education class for Hearing and Visually Impaired Students

*Kogo Yuka¹, *Kazuhiko Amano¹ (1. Tsukuba University of Technology)

[学校保健体育-SA-2] Possibility for university physical education classes by including gender and sexuality perspective

*Noguchi Aya¹ (1. Juntendo University Faculty of Health and Sports Science)

[学校保健体育-SA-3] Possibility of university physical education classes utilizing tangible and intangible cultural properties that lead to multicultural understanding

*Hosotani Yoko¹ (1. Toyo University)

(Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第3会場)

[学校保健体育-SA-1] Physical education class for Hearing and Visually Impaired Students

*Kogo Yuka¹, *Kazuhiko Amano¹ (1. Tsukuba University of Technology)

＜演者略歴＞向後佑香氏

筑波大学体育センター・特任助教（2012.7～2015.3）、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター・助教（2015.4～現在）

＜演者略歴＞天野和彦氏

筑波大学体育科学系・文部技官（1991.5～1993.3）、筑波大学体育科学系・助手（1993.4～1996.3）、筑波技術短期大学・助手（1996.4～2005.9）、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター・准教授（2005.10～現在）

平成28年4月1日より障害者差別解消法が施行されました。これに伴い、多くの大学で、障害学生の受け入れと障害学生に対する支援体制の整備が進んでいるものと思われます。一方で、障害種別や程度によって、求められる支援内容は多岐にわたるため、多様なニーズへの対応に困難を感じている大学もあると考えられます。そのような中、さらに座学とは異なる配慮が必要とされる体育授業において、障害学生への対応はまだまだ担当教員個人の試行錯誤に委ねられる部分が大きい状況にあるのではないのでしょうか。様々な背景を持つであろう全ての大学生に対して、より良質な大学体育の授業を提供していくためにも、大学における障害学生の教育・支援について実効性のある知見を大学間で共有していくことは大変重要と考えます。そこで、筑波技術大学はわが国で唯一の聴覚・視覚障害学生のための大学であることから、本シンポジウムでは、本学における体育授業の現状、および体育授業を行う際の聴覚・視覚障害学生のための配慮と工夫について発表します。この発表が障害理解の深化や大学での体育授業における支援拡充の一助となることを期待いたします。

(Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第3会場)

[学校保健体育-SA-2] Possibility for university physical education classes by including gender and sexuality perspective

*Noguchi Aya¹ (1. Juntendo University Faculty of Health and Sports Science)

＜演者略歴＞

順天堂大学スポーツ健康科学部助教。専門は「スポーツと開発」と「スポーツとジェンダー・セクシュアリティ」。米国の大学院卒業後、スウェーデンでプロ女子サッカー選手を経験。その後、ザンビアのNGOにて半年間、スポーツを通じたジェンダー平等を現場で実践。帰国後、スポーツ庁国際課に勤務し、2018年から所属大学で勤務を開始。現在、国際基督教大学博士後期課程課程在籍。一般社団法人S.C.P. Japan共同代表。

大学体育は教員が独自性を発揮し「楽しむこと」を中心に据えた授業づくりができることから、目的や意義はこれまで、運動機会の提供、生涯スポーツの導入、ソーシャルスキル獲得の場などと言われてきた。大学体育は学生のスポーツ参加のハードルを下げ、多様な目的を運動に持つ学生たちを包摂してきたと言えるであろう。一方で、これまでの大学体育において、ジェンダーやセクシュアリティの課題はあまり議論されてこなかった。女子学生の運動機会や種目選択は男子学生と本当の意味で平等なのだろうか。多様な性自認や性的指向を持つ学生たちにとって、機会の平等と心理的安全は保障されていると言えるのか。また、大学体育は学生たちが真の公正や平等について考え、議論を深める場としても有効であると考えます。性別、性自認、性的指向、性表現に関わらず、誰もがスポーツに平等に安全・安心にアクセスできるスポーツ環境を議論することは、誰もが安心・安全に豊かに暮らせる共生社会を考えるきっかけも創出するであろう。小学校の義務教育から学生たちの身近に存在し

てきた体育だからこそ、ジェンダーやセクシュアリティの課題を身近に感じてもらうことができるのではない
か。

(Wed. Aug 31, 2022 2:00 PM - 3:50 PM 第3会場)

[学校保健体育-SA-3] Possibility of university physical education classes utilizing tangible and intangible cultural properties that lead to multicultural understanding

*Hosotani Yoko¹ (1. Toyo University)

<演者略歴>

博士（スポーツ科学）。早稲田大学大学院博士後期課程単位取得退学後、四国大学講師、リオデジャネイロ州立大学客員研究員を経て2018年より現職。ダンスや体操経験を活かし大学在学中にカポエイラを始め、国際大会優勝・入賞多数。エスニックスポーツの変容や教材化を研究する。本学会ではスポーツ人類学専門領域所属。

これまで発表者は、2008年から断続的に、有形・無形文化財を活用した大学体育授業（半期・集中・単発含む）を行ってきた。前者については、日本遺産有形文化財である四国遍路の一番札所から六番札所（約15km）までの歩き遍路体験を通じて、ウォーキングによる健康維持促進と、地域住民との触れ合い（お接待含む）による地域文化理解を深めることを目指した。一方、後者については、ユネスコ無形文化財のブラジル伝統格闘技カポエイラを扱った。授業では技術習得のみならず、既存の競技スポーツと異なる価値観で行われるカポエイラ固有の世界観の体験を通じた異文化理解促進を目指した。真の多文化・異文化理解とは一朝一夕の知識習得や体験だけでは決して成しえないが、体育授業における、自らの身体を介する短期的体験だけでも、異文化理解の入口として当該文化を内側から捉える好機となる。こうした体験は、受講生のその後における多文化をとらえる視点づくりに有益なのではないか。そのような観点から、両者のこれまでの実践事例を踏まえて、共生社会の創造に向けた大学体育授業の可能性について提案する。